

「公開授業」の取組み

教育学部 米 津 光 治

＜公開した授業＞

- ＊科目名：「体育科教育Ⅱ」
- ＊日 時：2009年11月10日（月曜日）3限
- ＊教 室：サブアリーナ
- ＊対 象：教育学部3年（学部共通）

1 はじめに

本研究所によるFDに関する研究を開始したのは2007（平成19）年度であり、その際、平沢所長の指示により研究所研修部主任としてメンバーに加わった。その時点においては、私自身、FDという言葉の意味さえ充分に知らなかったが、「大学授業研究会」のメンバーをはじめ、多くの皆様の協力と理解のもとに、他大学におけるFD活動の事例研究から始まって以来、なんとか3年目を迎えることになった。

さて3年目ということは、一般的にも研究の成果をまとめるということの意味するであろう。本年度の研究所会議において、FD研究及び「公開授業」も、とりあえず「やってみることを重視してここまできたような気がするが、そろそろ「やってみた」ことの反省を踏まえて、次のステップに向けた準備を始める時期であろうという点で一致した。その意味でも、今回、越谷キャンパスにおいて、三学部の教員による一週間の「授業公開週間」を設け、最終日に「研究協議会」を開催したことは、これまでのFD研究の成果を生かす一つの提案であった。

2. 公開授業の概要

本授業では、小学校体育の内容について、受講生が教師役となって「模擬授業」を実施しながら授業を展開するもので、新カリキュラムにより「体育科教育Ⅰ」と併せて必修となった。本授業では、陸上運動、器械運動を取り扱い、模擬授業を通して、体育科における授業実践のための基礎的な能力及び授業実践上の問題解決能力の育成を図るとともに、体育科教育学の理論の理解をねらいとしている。学生自らが計画・実施した模擬授業を通して、授業実践上の問題解決能力の獲得を期待している。

授業を実践する際には、多くのことを考え、決定することが求められる。例えば、計画立案段階では、どのような指導方法で単元を展開するか、教材、学習形態、学習資料等はどうするかという問題がある。また、施設・用具などの学習環境等についても事前に把握しておかなければならない。授業では、どの学習者を観察しフィードバックを与えるか、安全面での配慮はもとより、突発的な問題への対応、計画と実際のズレへの対処等、その場で即座に決定しなければならないことが多々ある。授業後には、授業計画の修正など、次の授業改善に向けた取り組みも必要である。

このような授業実施に生じる多様な問題を解決できる能力は、自らの実践を振り返るこ

とによって高めることができるため、授業後には、授業者による自評後、全員でディスラッションを行うとともに「授業評価票」を記入し、授業者にフィードバックした。併せて、運動特性や授業における配慮事項等を踏まえた指導・講評を行った。

昨年度に引き続いての公開授業であったためか、残念ながら参観者はゼロであった。

3. 今後の公開授業のあり方

1998年の大学審議会答申により、課題追求型の人材を育成する大学教育の在り方が提言され、大学の教育力・授業力が問われるようになり、本学においても、授業アンケート、公開授業等が実施され、FD活動は少しずつ定着してきたように思われる。

私が公立学校教員から大学に転じたのは5年前であるが、周囲から「大学は休みが多いでしょう」、「好きな研究をして給料が貰えていいですね」などと言われたが、確かに大学教員は、論文を書いて研究業績を上げ、教員としてのノルマを果たしていれば、誰からも文句を言われることはない。大学では、教員や指導主事として経験してきたような「研究授業」や「授業参観」、あるいは「学校評価」などはないし、学生による授業評価など気にすることなく、自分の好きなこと、専門領域を好き勝手に講義すれば事足りると私自身思っていた。しかし、今ではそうした意識を変えない限り、問われている教育改革、大学改革はできないのだと深く反省している。

一方では、学生の評価を気にするあまり、授業に向かう意識・姿勢がどこか窮屈になっていないかと気になるところもある。近年の大学では、学生に対する教育・生活・就職などの支援を充実させることに比重が置かれ、研究活動が軽視されがちであるという指摘もある。生き残りをかけた私立大学にとっては仕方ないことかもしれないが、大学は、やはり最先端の研究成果を直接学生に伝え、高校までとは異なる高度な学識や批判精神を教授することも必要であると思う。本学のFDも、そうした姿勢に配慮し、質の高い目標を定めたFD活動を実施し、その成果を大学運営につなげていくことも必要である。

FDは広い意味を持ち、多面的な活動が求められるが、これまでの本学のFDは、「学生による授業アンケート」の定着に力を注いできた感がある。授業アンケートは、その結果がフィードバックされ、実際に授業が改善されて初めて意味をもつ。私自身も、この授業アンケートによって自分の欠点に気づかされ、それなりに良い方向で活用してきたつもりである。今後は、学生のために、より質の高い授業を目指した授業内容と授業方法の改善・向上への取り組みに終わりはしない。全教員が一丸となったFD活動の一層の充実が求められていると考えている。

平成 21 年度 授業公開 授業計画書

2009 年 11 月 10 日(火)3 限

学部	教育	授業者	米津 光治		
授業科目名	単位数	講・演・実	年次	公開教室	
体育科教育Ⅱ	必・選 (2)	実習	3 年	サブアリーナ	
本時の目標 学生が模擬授業を実施することを通して、授業実践上の課題解決能力の育成を図るとともに、体育科教育学の理論の理解を図ることをねらいとする。 教員役の学生は、単元や教材についての研究を深め、授業のマネジメント能力を高める。児童役の学生は、授業を振り返り、分析する能力を高める。					
本時の内容 小学校体育かにおける、陸上運動と器械運動の模擬授業を取り上げてきた。本時は、低学年の器械・器具を使った運動遊びの中の「跳び箱を使った運動遊び」、中学年及び高学年の器械運動の「跳び箱運動」の授業を取り上げる。					
本時の展開 ① 3 名の学生が教員役となり、跳び箱運動の低・中・高学年の授業を担当する。 ② 教員役以外の学生は全員児童役になり、25 分程度で模擬授業を実施する。 ③ それぞれの授業終了後に、授業者自評及び全員でのディスカッションを行なう。 ④ 3 名の授業終了後に、授業担当者より指導・講評を行なう。 ⑤ 児童役の学生は、3 名の授業について、評価票を用いてそれぞれの授業評価を行なう。					
本時の評価の視点(参観の視点) ① 学生が意欲的に授業に取り組んでいたか。（表情や拍手、歓声など） ② 学生が何を学習し、何を身に付けようとしているかがわかる授業であったか。 ③ 学生同士の教え合い、高め合う姿がみられたか。 ④ 授業の約束事が守られ、授業展開がスムーズに行なわれていたか。（効率的か） ⑤ 教員は、適切な助言を与えていたか。					